
蝶々の庭

リリィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝶々の庭

【Nコード】

N1404M

【作者名】

リリイ

【あらすじ】

夢の中だからって浮気しちゃいやよ。

小さな箱庭には彼と私しかいなかった。

私は彼さえいればなんにも要らなかった。

彼に近寄って触れようとするものは全て拒んだ。

彼が少しでも私から離れようとしたなら、二度と繰り返すことないように酷く痛め付けた。

何も見なくていいのよ。

あなたには私だけあれば。

醜くて惨めで、光が射さない深海のような箱庭。

それでも彼は毎晩「愛してる」と言ってくれた。

私は毎晩髪を撫でられて眠った。

心底私を失うことを恐れているみたいに柔らかく繰り返される言葉。まるで毛皮を失った猫を撫でるような、痛みなど1ミリも感じさせまないとするような優しい手つきに撫でられて眠った。

だけど私は、こんなに彼から全てを奪って、彼の頭の中を無理矢理私で埋め尽くしてみても、愛してるなんて全部ぜんぶ嘘でいつかなくなるくせにと思っていた。

本当に埋まるわけなんてないのだから。

数百と幾度目かの夜。

彼の隣で知らない女が寝ていた。

心臓がぎゅうつとして背中一面を針で突かれたような嫌な感覚。ほらね、やっぱり裏切った。

馬鹿にしゃがって、死にたいのね。

瞬間、私は彼の横っ面を蹴り上げた。

首に掌をのせ、全部の体重をかけた。

白目にみるみる赤く細い血管が走っていく。

違う、夢だ、と口の端から泡と一緒に吹き出す言い訳を聞いた。

私は嘔吐き、嘔吐き、と眩きながらただ自分の手元を眺めて、親指が交差したこの掌の形は影絵の蝶々みたいだと思った。

浅い眠りを繰り返して、夢と現実の境目を見失った。

泣きながら起きて、ぐしゃぐしゃの顔をぬぐって周りを見回すと彼はまだ静かに眠っていた。

いつもの穏やかな二人だけの箱庭。

夢だったのか、現実だったのかなんてもうどっちでも変わらない。

もう邪魔ものはいれちゃいけない。

あんたが誰かのものになったら、私は気が違ってしまっただけはわかったよ。

彼の首に広がった葡萄色の蝶々を見るととても悲しくて、

だけどやっと私だけのものになった印みたいで愛おしくて。

その時やっと彼が毎晩言い続けていた言葉が私の体中を満たしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1404m/>

蝶々の庭

2010年10月14日08時16分発行